

---

# **彼の人への贈り物～飛脚小町・あやめの配達日記～**

笠原綾乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼の人への贈り物～飛脚小町・あやめの配達日記～

### 【Zコード】

N1139D

### 【作者名】

笠原綾乃

### 【あらすじ】

年の瀬が押し迫ったある日のこと、「飛脚小町」と評判の町飛脚、あやめはある人の想いがこもった簪を届けるため、同僚の惣吉とともに品川へと向かうが……。

(前書き)

この作品は、風海南都さま主催の「ギフト企画」参加作品です。  
「ギフト企画」で検索すると、ほかの先生方の素敵なギフト（作品）  
を読むことができます。  
ぜひ、紐解いてみてください。

すっかり冷え切った空気が、風となつて私の身体をすり抜ける。

目の前で揺れる鈴の音が、耳に心地いい。

「お、『飛脚小町』だぜ」 「相変わらず早えな」

両側に並ぶお店を横目に走る私とすれ違ひざまに蹲する声が、耳にふれた。

『飛脚小町』、か。

実はこの名前、私は好きじゃないんだ。

私、あやめがこの仕事を始めて約二年。ことあるごとに

『今日は女の配達かい』 『荷物は大丈夫なんだろうね』

と言われたもんだ。

最近は『女』の代わりに『飛脚小町』なんて体のいい呼び方されてるけれど、心から受け入れてるわけじゃない。身体を張つて仕事をしている以上は、男も女も関係ない 私はいつも、そう思つてる。

だから、仕事をするときは化粧もしないし、男の人と同じように長い股引ももひきを履き、胸元はさらしを卷いたあとに丼どんぶりをつけてその上に

男物の着物を羽織つて、腰元でたくし上げる。髪だつて、仕官にあぶれたお武家さんと同じ形にしている。

寂しくない、と言えば嘘になる。

私だつて、普段配達にいく大店のお嬢さんのような綺麗な着物を着て、かわいい簪かんざしを挿して、街を歩いてみたい。

だけど、五年前、十一のときに死んだ母さんが口癖のよつと言つていた。

『男にすがらなきや生きていけないよつな女にだけは、なつてはいけないよ』と。

女中奉公していたさる大店の主人と恋仲になつたあげくに捨てられた自分と同じ道を、娘の私にはたどつて欲しくなかつたんだろう。

「よ、あやめ。配達終わつたか」

「惣吉さん」

一回り大きな鈴を鳴らし、私と並んで走るこの男性は、私が働いている飛脚問屋の跡取り息子だ。

男性にしては田たが大きく、鼻筋も通つていて美形だけに、お見合い話はひきもきらずに押し寄せるし、道を走れば

「惣吉さん」「いつかを向いて」

と、旅居小屋の役者に向けられるような歓声を浴びるにも関わらず、

女性にはとんと興味がないらしく、見向きもしない。

「うふ。でも私用であと一件あるんだ。惣吉さんね？」

「「ひまむき終わり。あと一件つて、どうだよ？」

「品川」

「品川つたら、宿場町だろ」

「うそ、神田の棟梁だった、文吉さんのおかみさん」

私と同じ長屋の文吉さんの妻、おちかさんは、外を走り回って日  
に焼けている私とは正反対で色が白く、いつも笑みを絶やさない、  
優しい女性だった。

怪我で働けなくなつた棟梁の代わりに働きに出て、もうじき一年  
になる。

棟梁は、月に一度送られてくるお金の一部をためて、奥さんに立  
派な簪かんざしを買つて、それを届けてくれるように私に頼んできた。

今朝、仕事が終わつたら品川に届けに行きたこと那さんに言つ  
たら、快く許してくれたのだ。

白い息とともに、彼もまた大川（現・隅田川）の橋を越えてくる。

「あれ？ 配達終わつたんじゃなかつたの？」

「品川までは、お前の足じゃ遠いだろ？ 年の瀬は何かと物騒だか

うな。つこひつてやるよ」

「女だと思って、軽く見ないで」

惣吉さんの横顔をちらりと見て、私は頬を膨らませる。

「一里から品川まではおよそ一里（約八キロ）。

江戸の町を照らす光は、少しずつ西の方角へ落ちてくる。およそ今  
は、羊の刻（午後二時頃）を過ぎたくらうだらう。

時間を考えると、確かに、私一人では少し不安が残る。一里は、  
惣吉さんの好意に甘えるのも一つかもしれない。

でも、面と向かってそんなことを言つのが恥ずかしい私は、彼から先ん出て、前を向いたまま走り続けた。

上野を出てから、半刻（一時間）あまりが過ぎた。

町中を出てからは、収穫の終わった畑や葉の落ちた木が遠くに立ち並ぶ街道筋に入る。

建物がほとんどない分、向かい風にさらされた身体が冷えるのが早い。

朝から夕方まで江戸の町を走り慣れている私でも、木でできた籠

を持つ手に、力が入らなくなり、速度が少しずつ遅くなる。

「あやめ。眞せよ」

私の状態に気づいたのか、惣吉さん手をひし伸べてくれる。

「いいよ。大丈夫」

空を赤く染めはじめた陽の光を横田で見ながら、私は足を動かす。

「落としたりしたら大変だろ。いいから」

彼は私に近づき、籠を無理やり交換した。何も入っていない彼の籠は軽く、少しだけ、手が楽になつたような気がした。

「今日は十一月二十四日か。正月まであと七日だな」

「うふ。おつかさん、誕生日なんだって」

「へえ。わつか。そりゃ、今日中に届けてやらなことな

「うふ」

少し前を走る惣吉さんが、私を振り返つて笑つた。

うなずいた私は、彼に追いついて速度を上げる。

ところがこきなり、惣吉さんが立ち止まつた。

「どうしたの？」

惣吉さんの肩越しに、何人かの男が近づいてくるのが見えた。

長い髪を下ろしただけ。もしくは、結つてはいるが、あちこちから後れ毛がはみ出している者もいる。

手には、草を刈るときにつつかう鎌や、脇差を持つている。

「あやめ。俺が奴らを引きつけるから、お前はこれだけ持つて先に行け」

惣吉さんは膝をつき、籠から簪の入った木箱を私の胸元に入れる。

「惣吉さんを置いていくなんてできないよ

「俺たちの仕事は、お密さんの荷物を届けることだ。文吉さんの想いがこもった贈り物なら、なおさらだろ?」「

「でも」

なおも言ひすがる私を背に隠した惣吉さんは、互いの籠の先端に仕込んであった短刀を一本、引き抜いた。

「俺が合図したら、全力で走れ。お前の足なら、あと四半刻（約三十分）もせずに着くはずだ」

連中から私を隠す惣吉さんの背中はうんと大きくて、私の視線には、自分が着ている着物と同じ柄しか見えなかつた。

一瞬、辺りが光る。

「あやめー 走れ」

惣吉さんが私を逃がすよつて、奴らと身体を入れ替えて叫んだ。

私は、はじかれたよつて走り出す。

後ろを振り返ると、田の辺りを押された男らがふらつきながら、惣吉さんと対峙しているのがわかる。

惣吉さんのもとへ引き返したい気持ちをこじらせて、私は、前だけを見て走り続けた。

『俺たちの仕事は、お姉さんの荷物を届ける』こと

彼に言われたこの言葉を、心の中で何度も繰り返しながら。

品川のに着いたのは、それから四半刻を少し過ぎてからだった。  
辺りはすでに闇に覆われ、息を切らして歩く私を、宿場から漏れ  
出る灯りが優しく出迎える。

私はとつあえず、おちかわんが働いている宿、きのと屋に立ち寄  
つた。

「あー、あやめさんじゃありませんか」

入り口を灯す提灯に照らされたおちかさんの顔色はさうぞ白くな  
り、少し痩せたように見える。

「田中さんから頼まれて、これを届けに来たの。今日、誕生日なん  
だってね」

私は胸元から、小さな木箱を取り出した。

「あの人……」

「うん。おちかさんが仕送りしたお金を少しづつ貯めて、買ったん  
だって」

おちかさんは震える手で、そつとふたを開けた。

細かな細工を施された銀色の簪が、雲の隙間から覗く月に照らさ  
れて光っている。

「私がつけてあげるよ」

乱れた髪を整え、私はそつと簪を挿した。

おちかさんの田中からほめる涙が、頬を濡らす。

「ありがとう……。ありがとう、あやめさん。私、これでまた頑張  
れるわ」

おちかさんが、私の手を握りしめて何度も頭を下げる。

私の心にも、熱いものがこみあげた。

「よかつたね、おちかさん。本当に……」

最後は、言葉にならない。

文吉さんの想いを届けることができて、よかつた。

私は、強く思う。

けれど……。

品川に着くまでに追いかけてこなった惣吉さんのことが、脳裏を駆け巡る。

「あやめさん、今日は泊まって行つてくれるでしょ?」

「じめんなさい。私、急いでるから。仕事……頑張ってね」

骨ばつたおちかさんの手をもつ一度強く握つて、私は彼女に別れを告げた。

大小の建物が向かい合わせに立つ道を歩く旅人の間を縫つて、今来た道を引き返す。

すれ違う人々に視線を走らせる。

でも、惣吉さんらしい人はどこにも見当たらない。

いつの間にか品川の宿場町を抜け、街道にさしかかった。

でも、じつに歩いて来るのがうな人影すら、ない。

「……这儿に行っちゃったのよ。まさか、死んじゃったの？」

さつき感じた幸福感とはうつて変わった悲しみが、私の心を支配する。

私の後について来なければ、惣吉さんは死なずにすんだのに。

身体中の力が抜けた私は、その場に座り込んだ。

嗚咽とともに、涙が私の膝に落ちる。

「惣吉さんのはか……。馬鹿やつ……」

暗闇に向かつて、私は叫んだ。すると。

「……誰が、馬鹿だつて？」

荒い息とともに、惣吉さんの声がかすかに聞こえた。

しかし、彼の姿は这儿にも見えない。

「惣吉さん、这儿にいるの？」

「地蔵の裏……」

私は、すぐ前にある祠へ走る。祠：しらべ

後ろへ回ると、上げた手を力なくぱりぱりせせつてこの惣吉さんが座り込んでいた。

「惣吉さん……」

「荷物、無事に届けたか

息を何度も吐き出しながら、惣吉さんが訊ねてくる。

惣吉さんが無事だったことが嬉しくて、私はただうなずくことができない。

「泣くなよ。俺が死ぬわけないだろ？」

「だつて……」

涙が止まらない私の身体を、惣吉さんが自分のほうへ引き寄せた。

驚いて身を硬くした私の背中を、何度も優しく叩く。

恐怖と不安、そして冬の寒さで冷え切っていた私の心と身体が、ゆっくりと癒される。

「おい、あやめ。見てみろよ

惣吉さんに言われて顔を上げた私の頬に、冷たい何かが触れる。

「……雪だ」

薄い雲の向こう側にある月のやわらかな光に照らされた白い花び

らが、仕事を終えた私たちをねぎらいみつこ、ゆっこじと舞い降りてきていた。

(後書き)

「お付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。やはり、時代ものでチャレンジするのは無謀だったようです（涙）。

ですが、楽しく書くことができました。風海先生をはじめ他の先生方、お疲れ様でした！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1139d/>

---

彼の人への贈り物～飛脚小町・あやめの配達日記～

2010年10月10日02時20分発行